

自、
上、
鑑、
焉。

秋期行軍の歌

助教授

園哲雄

秋の思ひを、各自
軍の學び、せんものと

逆立つ髪の、恨をば

光は澄みて、八ツ足らぬ

枕に近き雁の聲

わくる袂に、れさまさる

叢つゝき、むらくと

われに語合、心持せり

見にけん夢の、古事は

まだあらかねの、地の上に

さらす錦の、もみぢ葉は

凝さんよりは諸共に

ゆくやちまたの、ゆきかひに

益荒丈夫が、取る銃に

七尾の城に武士の

聞し哀れや、いかおりし

岡邊の薄徳に出でよ

集ける虫の、聲々は

尋ねよ尋ね、能く尋ね

即現の、龜鑑あり

墮ちぬぞ勵め、つくづくと

赤き心に、照りまがふ」

明治廿三年の秋期行軍の歌

全

室すみわたる、秋の野に

時ぞ來ぬめる、いざ子とも

人よつ虫の、聲すあり

われかどゆきて、吊らはん

駒よ鞍おけ、たつ田山

唐紅の、色こに

心を野邊に、打ち出でよ
舊にし跡の、ゑのばれて
思ひえさせて、觀る月の

鎧の袖を、らたしきて
萩の上風、萩の露

戦やは人を、招くかや

戦ひありし、ろのかみを

窮めや窮め、彌窮め

世は漁季あれど、日や月は

見渡す四方の、嶺に尾に